

経営意識を働かせる

松下幸之助さんは、松下電器という会社においては、電気器具の優良品をつくらなければならないが、そのためにはまず人をつくるということ、すなわち人材の育成に成功しなければならないと、創業まもないころから考えていました。

そういうこともあって当時の社員に、お得意先の人たちから「松下電器は何をつくる場所か」と尋ねられたら、「松下電器は人をつくる場所です。あわせて電気製品もつくっております」と答えるように、といていたそうです。

では、どのような人をつくるのが願いだったのでしょうか。それはひと言でいえば、経営意識が働く人、つまり経営のできる人を育てたいということです。そうした考え方を、松下さんは社内の朝会の場でくり返し訴えていました。

小さな仕事も一つの経営

われわれはわれわれの仕事を、いずれも一つの経営と考えなければならぬ。どのような小さな仕事もそれが一つの経営なりと考えるときには、そこにいろいろ改良工夫をめぐらすべき点が発見され、したがってその仕事の上に新しい発見が生まれるものである。世間すべての人々が同じように努力しながら、成功する人はまれであるのは、いま言うところの経営の観念に欠け、何らの検討工夫をなさず、ただ仕事に精出しているにすぎないからである。

本所もかくのごとき人々の集団であるときは、その将来も危ぶまれる次第である。一人で世間へほうり出しても立派に独立独歩し、何をして一人前にやっている人々の集まりとなつてこそ、所期の目的が達せられるわけであり、かつ、かく経営者たるの修養を積むことによって、諸君各自の将来もいかに力強きものがあるかを考えねばならぬと痛感する次第である。 (昭和8年〈1933〉12月16日)

経営意識を働かせなければダメである

諸君の真摯なる努力により年一年、伸展を見つつあることはまことに喜ばしい次第

第であるが、さてひるがえって考えるとき、自分の責務はこれに伴うて加重するのである。すなわち諸君の努力を生かすも殺すも、自分の指導よろしきを得るか否かによって決せられるのであるから、深甚の考慮をはらわなければならないことを痛感する。しかしながら諸君憂うるなかれ。自分には確固たる経営方策があり、断じて誤らざることを明言しうるのである。安心して追隨してきてもらいたい。

ただし諸君は、各自受け持った仕事を忠実にやるというだけでは十分ではない。必ずその仕事の上に経営意識を働かせなければダメである。いかなる仕事も一つの経営と観念するところに、適切な工夫もできれば新発見も生まれるものであり、それが本所業務上、効果大なるのみならず、もって諸君各自の向上に大いに役立つことを考えられたい。

されば諸君に、きょうのお年玉としてつぎの標語を呈しよう。

「経営のコツこことなりと、気づいた価値は百万両」

これは決して誇大な妄語ではなく、真に経営の真髓を悟りえた上は、十万百万の富を獲得することもさしたる難事ではないと信ずるのである。

(昭和9年〈1934〉1月1日)

「社員という稼業」の社長

松下電器においては、時代の進展のなかで、松下さんがこのようなことを訴えていた昭和8、9年(1933、34)当時と比べ、業容も社員の意識も大きく変化してきました。小、中規模の企業として発展に次ぐ発展を続けていたころは、それぞれの社員が、いつでも新しい部門の責任者としてやっつけられるように準備をしておくことが常に求められていました。ところが時代の進展とともに企業の規模が拡大し、仕事も組織を中心に進められるようになって、その内容もかなり細分化されたものになってきますと、「自分の仕事に経営意識を働かせよう」「経営のコツをつかもう」と言われても、実感しにくくなるという状況が生じてきたのです。

そうしたことから松下さんは、昭和30年代以降には、「自分は社員という稼業の社長である」と考えてみてはどうか、と呼びかけるようになります。